

# 不登校生徒への初期対応と 校内体制についての研究

—欠席3日目シートの活用を通して—

2018/3

四日市市教育委員会 教育支援課

## はじめに

現在の子どもたちが社会に出る頃には、少子高齢化や、グローバル化、情報化がさらに進み、先を見通すことがますます難しい時代になることが予想されます。

予測できない未来に対応するためには、社会の変化に受け身で対処するのではなく、自身が身に付けた知識・技能や収集した情報、体験等を活用し、他者と協働しながら主体的に問題を解決していく資質・能力を育むことが大切です。これらの力を育成するために、新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」を掲げ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を求めています。

本市においても、「学ぶこと」と「社会とのつながり」を意識した教育課程を実現し、「社会人になっても通用する問題解決能力」の養成を図ることを本市の教育ビジョンの中で第一の施策として掲げています。そして、平成25年4月に発行した「問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック」を平成29年3月に改訂し、授業改善を進めてきました。これらのガイドブックでは、子どもの思考過程を「5つのプロセス」で表し、「四日市モデル」として示しました。この考え方を課題研究にも取り入れ、「四日市モデル」を活用した授業のあり方について研究を進めています。

本年度の課題研究では、小学校音楽科においてタブレットPCを補助的に活用することで、「音楽づくり」を活性化させる研究に取り組みました。また、中学校外国語科においてスキット作りを手がかりに英語での会話を活性化させるための研究を行いました。さらに、本市の課題である不登校に対して、不登校児童生徒への初期対応や校内体制のあり方について、調査・研究を進めて参りました。

その成果を調査研究報告書として、ここにまとめました。これらの研究成果が、学校・園の日々の教育実践に活用されることを期待します。

末尾になりましたが、本課の研究調査を進めるにあたって、御指導・御助言いただいた国立教育政策研究所初等中等教育研究部総括研究官の山森 光陽様をはじめとして、研究協力員並びに調査・実践面で御協力いただきました学校等の関係者の皆様に心から感謝の意を表します。

平成30年3月

四日市市教育委員会教育支援課  
課長 川邊 雅史

— 目 次 —

1 問題	1
2 目的	10
3 方法	11
4 結果	13
5 考察	17
[引用文献]	21
[資料]	22

## 不登校生徒への初期対応と校内体制についての研究

### －欠席3日目シートを活用を通して－

## 1 問題

### 1.1 不登校の発生率の現状と課題

#### 1.1.1 不登校発生率の現状

「平成 28 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省）によると、全国の児童生徒の不登校発生率は、小学校ではほぼ横ばいで推移し、中学校では平成 19 年度以降緩やかな減少傾向であった。しかし、平成 24 年度以降再び増加し、平成 28 年度の不登校発生率は小学校が 0.48%、中学校が 3.01%となった（Figure 1）。

本市の不登校発生率は、小学校では平成 23 年度に減少したものの平成 24 年度から再び増加に転じている。中学校では平成 24 年度に減少したが、その後は緩やかに増加している。平成 28 年度の不登校発生率は小学校が 0.66%、中学校が 3.66%であり、小学校と中学校の発生率を比較すると明らかに中学校の発生率が高くなっている。

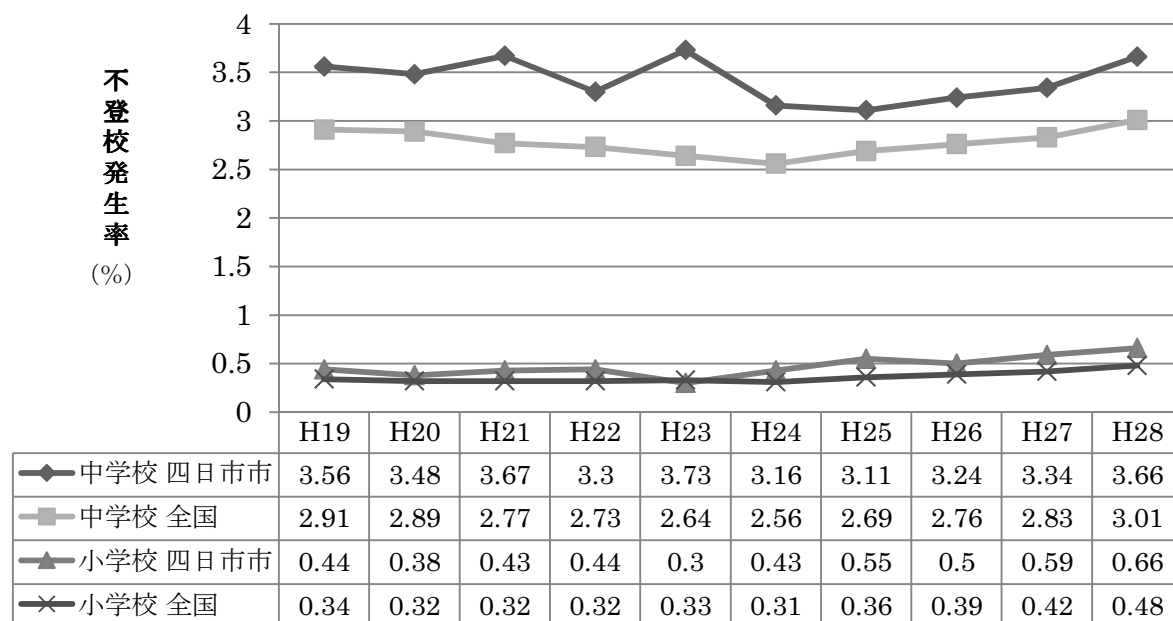


Figure 1 不登校発生率の推移（平成 19 年度～28 年度）

さらに、「平成 28 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」における「不登校児童生徒への指導結果状況」（文部科学省）によれば、「指導の結果登校するまたはできるようになった児童生徒の割合（復帰率）」は、小学校で 28.9%、中学校では、27.8%に留まっている（Table 1）。また、本市の不登校児童生徒の復帰率は小学校が 17.0%、中学校 18.9%で全国平均を下回っている。

以上のことから、一度不登校になった児童生徒が学校復帰することは、難しい状況にあることがわかる。本市においても、新規の不登校児童生徒数を減少させていくために、不登校を未然に防止する初期対応の取組が必要であると考えられる。

Table 1 不登校児童生徒への指導結果状況（平成 28 年度）

区 分	小学校		中学校		小学校		中学校	
	(全国 国・公・私)		(全国 国・公・私)		(四日市市 公)		(四日市市 公)	
	人	%	人	%	人	%	人	%
指導の結果登校する またはできるようになった児童 生徒(復帰率)	9,006	28.9	28,733	27.8	17	17.0	59	18.9
指導中の児童・生徒	22,145	71.1	74,514	72.2	83	84.6	253	81.0

注)文部科学省・四日市市（2017）「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」より一部抜粋。

また、不登校の要因は、「本人」「学校」「家庭」といった様々な要因が相互に影響しあっている。例えば、要因が「学校における人間関係に課題を抱えている」17,721 人のうち 2,258 人は「家庭における状況」も関わっている。つまり、不登校の要因が重なり多様化していることがわかる（Table 2）。そのため、児童生徒への対応も個々に支援計画を立てて支援を行う必要がある。

Table 2 公立中学校における不登校の要因（平成 28 年度）

学校、家庭に係る要因 (区分)	分類別 生徒数	学校における状況								家庭における 状況	左記に該当なし
		いじめ	間人い 関じめ 係をを め除 ぐる友	を教 職ぐ 員と 問の 関係	学 業の 不 振	進 路に 係る 不 安	応活ク 動ラ 等プ 活動 不・ 適部	を学 校ぐ のき ま 題り 等	適学入 応・学 進・ 級時 の不		
「学校における人間関係に 課題を抱えている。	17,721	336	12,866	1,026	2,073	497	988	319	1,000	2,258	853
	-	1.9%	72.6%	5.8%	11.7%	2.8%	5.6%	1.8%	5.6%	12.7%	4.8%
	17.9%	77.2%	47.3%	44.9%	9.8%	10.0%	33.9%	7.6%	15.4%	7.8%	4.5%
「あそび・非行」の傾向が ある。	6,091	2	535	177	1,682	245	100	2,062	162	2,437	756
	-	0.0%	8.8%	2.9%	27.6%	4.0%	1.6%	33.9%	2.7%	40.0%	12.4%
	6.2%	0.5%	2.0%	7.7%	7.9%	4.9%	3.4%	49.3%	2.5%	8.4%	3.9%
「無気力」の傾向がある。	30,867	23	3,617	379	9,385	1,530	655	1,041	1,782	11,106	6,482
	-	0.1%	11.7%	1.2%	30.4%	5.0%	2.1%	3.4%	5.8%	36.0%	21.0%
	31.2%	5.3%	13.3%	16.6%	44.3%	30.9%	22.5%	24.9%	27.5%	38.4%	33.8%
「不安」の傾向がある。	29,738	56	8,902	519	6,508	2,340	986	483	2,735	7,447	5,581
	-	0.2%	29.9%	1.7%	21.9%	7.9%	3.3%	1.6%	9.2%	25.0%	18.8%
	30.1%	12.9%	32.7%	22.7%	30.7%	47.3%	33.8%	11.5%	42.2%	25.8%	29.1%
「その他」	14,539	18	1,276	185	1,522	339	185	279	795	5,659	5,489
	-	0.1%	8.8%	1.3%	10.5%	2.3%	1.3%	1.9%	5.5%	38.9%	37.8%
	14.7%	4.1%	4.7%	8.1%	7.2%	6.8%	6.3%	6.7%	12.3%	19.6%	28.6%
計	98,956	435	27,196	2,286	21,170	4,951	2,914	4,184	6,474	28,907	19,161
	100.0%	0.4%	27.5%	2.3%	21.4%	5.0%	2.9%	4.2%	6.5%	29.2%	19.4%

注)文部科学省（2017）「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」より一部抜粋。

上段は、分類別児童生徒数、中段は、各区分における分類別児童生徒数に対する割合、下段は、各区分における「学校、家庭に関わる要因（区分）」の「計」に対する割合。

## 1.1.2 不登校を未然に防止するための初期対応における課題

川崎市総合教育センター（2015）が教員に対して不登校に関する実態調査を行ったところ、「休み始めた欠席者への対応」の項目で、電話連絡や家庭訪問のタイミング、不登校のきっかけに対する認識が教員によってそれぞれ違うことから、初期対応にもばらつきがあると推測している。

また、大石（2005）は、「学級担任の役割が重要であることは理解されているが、1人でその問題を抱えこんで対応しなくてはならないという意味ではない」ことを強調している。その上で、適切な理解と支援ができるように、他教員や専門家の力を借りながら組織的に対応する必要性を述べている。

本市では、平成25年度から「欠席3日目シート」を作成し、不登校の初期対応に取り組んでいる。「欠席3日目シート」は児童生徒が連続欠席3日になった時点で担任が作成し、他の教員と短時間で情報を共有し、組織的に活用することを目的としている。また、累積欠席10日以上の児童生徒をリスク群<sup>1</sup>児童生徒とし、各校に初期対応を促している。これらの取組は、教師が児童生徒の欠席に敏感になること、教育相談や家庭訪問などの行動を早期にとることを目的としている。

しかし、本市の不登校の発生率は減少していないことから、初期対応において児童・生徒に対する共通理解、支援内容の統一といった教員の組織的取組がなされているか検証していく必要があると考える。

## 1.2 不登校の初期対応における取組

### 1.2.1 不登校発生率を減少させるための必要な取組

明石市教育委員会（2012）では、2011年から欠席1日目の電話連絡、欠席2日目の家庭訪問、累積欠席2～6日目の電話連絡と家庭訪問を各小中学校に指示し、不登校の初期対応の取組が成果をあげた。初期対応のマニュアル化が成果につながったと考えられる。

また、小林・早川・大熊・福島（2009）は、「問題の開始を早く感知し、初動をどれだけ早くするかが、教師が行える最大の不登校予防策である」と述べ、熊谷市の「月3日の欠席管理」の取組について報告している。熊谷市では、各校に月3日欠席した児童生徒を教育委員会に報告させ、報告された児童生徒の支援方法について助言するという取組を行っている。休み始めた児童生徒が、学校を快適だと感じられるということを大切にし、「本人の好きなこと、得意なことを探り、その面でつきあう」「子どもに活躍の場を与える」「できるだけ子どものつらさや苦しさを受け止め味方する」ことを柱に、具体的な支援内容を示したことが効果的であったと述べている。

一方、校内の支援体制を機能化<sup>2</sup>することで不登校防止に取り組んだ例がある。福岡市教育センターの研究（2016）では、主幹教諭等が推進する組織的な支援の在り方を明らかにするために、既存の校内支援体制を機能化し、役割を明確化する「校内支援モデル」<sup>3</sup>を提案した。その結果、欠席し始めた

<sup>1</sup> リスク群 本市では、累積欠席10日に達した児童生徒をリスク群として位置付けている。

<sup>2</sup> 校内の支援体制の機能化 福岡市教育センターは、既存の校内組織の中で不登校の課題を中心に扱う分掌を位置付け、その組織が目標の共有、役割分担、相互補助ができていない状態にすることを既存の校内体制の機能化と定義している。

<sup>3</sup> 校内支援体制モデル 福岡市教育センターが「校内組織の誰」「どの段階で」「誰（児童生徒自身、保護者、専門機関、教職員）に対して」「何を目的とした働きかけ」を行えばよいかを明確化したもの。

児童生徒への共通理解が深まり、教員の意識も変化した。校内でそれぞれの役割を明確化したことで、支援を円滑に進めることができたのである。

以上のことから、不登校発生率を減じるには、初期対応のマニュアル化、支援内容の具体化、校内支援体制の機能化、役割分担の明確化が必要であると考えられる。

### 1.2.2 組織的な支援を行うために必要な取組

文部科学省は、「不登校児童生徒への支援に関する最終報告」(2016)の中で、組織的、計画的な支援を行うには、学級担任、養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等の適切な学校関係者が中心となり、児童生徒や保護者等と話し合うなどして「児童生徒理解・教育支援シート」を作成することは、有効な施策であると述べている。

その先進的な事例として東京都や横浜市を取組を紹介している。東京都や横浜市では、不登校児童生徒一人一人の欠席状況、不登校となったきっかけ、関係機関との連携状況、本人及び保護者の希望、具体的な支援策、成果や見直しの経過を「児童生徒理解・教育支援シート」に記録し、共有することで、学校内外と組織的、計画的に支援を行った。その結果、学校からは「本人に寄り添った支援ができた」「教職員の役割分担が明確になり、意識が深まった」「様式を活用することで、支援のアイデアが増えた」「書き加えたり、変更したりすることで、引継ぎがスムーズになる」などといった効果が挙げられた。なお、横浜市では、不登校児童生徒数(小・中学生)が、平成21年度は3,862人、平成25年度は3,411人であり、4年間で451人減少している。

また、文部科学省は、不登校を生じさせないための学校内における計画策定、各担当・分掌との連絡調整、「児童生徒・教育支援シート」の取りまとめ等、学校としての組織的な対応を行うために不登校対策について中心的かつコーディネーターとしての役割を果たす教員を明確にする必要性を述べている。

福岡市の取組でも、担任、同学年教員、養護教諭、教育相談担当者、生徒指導担当、特別支援コーディネーターという各分掌の取組をそれぞれマニュアル化することにより学校としての方向性を統一した。福岡市教育センターは、このような支援体制が定着することで、「教職員の自己効力感や連帯感、協働への意識が向上し、不登校への対応に関する自身の活動イメージがされやすくなった」としている。また、支援体制を維持するためには、児童生徒の状況や学校内の各分掌の役割を理解し、児童生徒の見取りや関係者への情報伝達を行うコーディネーターの存在が重要であることも指摘している。

このように、学校内外の関係者が支援の方向性を統一し組織的な支援を行うためには、「支援シート」を作成することが有効である。支援シートを活用することで、それぞれの役割が明確になり、教職員の不登校に対する意識が向上し、教職員相互の協働が行われると考える。また、校内支援体制の核となるコーディネーターの育成も重要である。児童生徒の見取りを行ったり、学校内外の関係者への連絡調整を行ったりすることができるコーディネーターを育成していく必要があると考える。

### 1.3 不登校を防止するための先行研究

#### 1.3.1 不登校を防止するための初期対応の効果

久下（2013）は「(1) 欠席日数申し送りシート、(2)子ども理解のためのアセスメントシート、(3) 不登校早期発見のためのチェックリスト」という不登校を早期発見する3段階のシステムを作り、支援が必要な児童を的確にスクリーニングできたことから、上記のシステムが有効であったと結論付けている。しかし、自尊感情が低く、コーピングスキル<sup>4</sup>やソーシャルサポート<sup>5</sup>が不足した児童生徒に対し、自尊感情を高める支援を行い登校する意欲を高めることができたが、欠席日数の減少には至らなかったことも述べている。また、熊谷市では、児童生徒の欠席が3日に達した時点で取組を行うことにより、平成16年に不登校発生数の減少に効果があったことを示している。

さらに、只石・石津・下田（2012）は、欠席が始まる前に介入することによって欠席数が減少し、不登校を未然に防げる可能性があると述べた。その方法は、「Questionnaire-Utilities 検査」を中学1年生の早い段階で行い、「非承認群」に該当する生徒、「承認得点」または「学校との関係」（学習意欲・承認得点等）が低い生徒を絞り込む。そして、その生徒に対して支援を行うというものである。また、小学校から引き継がれる「小中連携シート」を併用することも効果があり、さらに小学生に中学生の授業を体験させることや、中学校の教員が小学校へ出向き、児童の様子を観察することも効果があると述べている。

#### 1.3.2 月3日の欠席管理を用いた不登校防止への効果

小林（2007）によると、「月2, 3日の欠席でも真剣にとらえて対応すること、5日を超えたら不登校と思って関わること」「教師が生徒に対して受容的であること」によって不登校発生数を減少させたという結果が示されている。

明石市教育委員会（2012）は、平成20年から平成22年までに連続欠席3日の児童生徒に対して、欠席1日目から3日目までの取組をシステム化したことで、成果をあげた。しかし、連続欠席3日ではないが、累積欠席が多い児童生徒が見逃されている事例を受け、平成23年からは、累積欠席2～6日についても同様の対応を行った。さらに、連続欠席3日と累積欠席7日のすべての児童生徒を対象に作成されたシートを担当部署にFAXで送り、助言を受けることをシステム化した。その結果、10月以降の不登校の出現を抑制する成果が見られた。

熊谷市では、「月3日の欠席管理」を、教員が子どもの欠席に敏感になること、教員を子どもに関わらせることを目的として平成14年から行っている。月の累積欠席3日の児童生徒について、理由の如何を問わず、欠席一覧表を作成している。また、累積欠席3日の児童生徒に対しては、「不登校対応個票」を作成し、「不登校支援チーム」を組織している。さらに、累積欠席が10日に達すると、「不登校対応個票」を用いて、専門家がコンサルテーションを行うといった取組で、不登校発生数を減少させた。その背景には、学校に対して、「不登校傾向のある生徒を意識して関わること（意識化）」

<sup>4</sup> コーピングスキル ストレス対処行動。ストレス反応を抑えたり、低減する行動。

<sup>5</sup> ソーシャルサポート ストレスを緩和し、精神的健康状態を良好にする作用がある支援のこと。



「チームで関わっていくために校内の支援体制を組織すること（組織化）」を目指した教育委員会の指導があった。欠席3日に注目したことが、早期発見につながり、校内の支援体制を組織化することが不登校発生数を減少させる効果があったと言える。

#### 1.4 本市の課題と課題解決に必要な支援の在り方

Figure 1 より、不登校発生率は本市・全国どちらも小学校より中学校の方が明らかに高い。その原因としては、大きな環境の変化が考えられる。数年の不登校発生率の動きを見ても中学校で不登校生徒を出さないための取組は必要であると言える。また、本市の学年別の不登校発生数からも中学校で新規の不登校発生数が増加していることがわかる。(Figure 2)。

古川・小泉・浅川（1992）は、「小学校を卒業して中学校に入学する環境移行事態において、子どもたちは、物理的にも精神的にも大きな変化を経験する。小学校から中学校への移行は、異なる校種への移行と児童期から思春期への移行とが重なり、二重の意味で危機的である」と述べ、中学1年生に注目している。

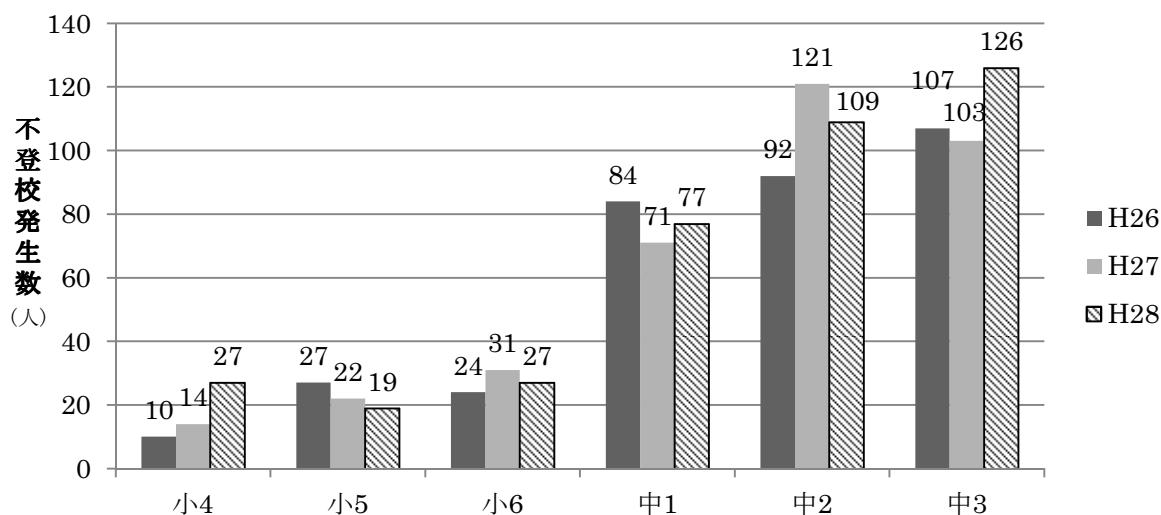
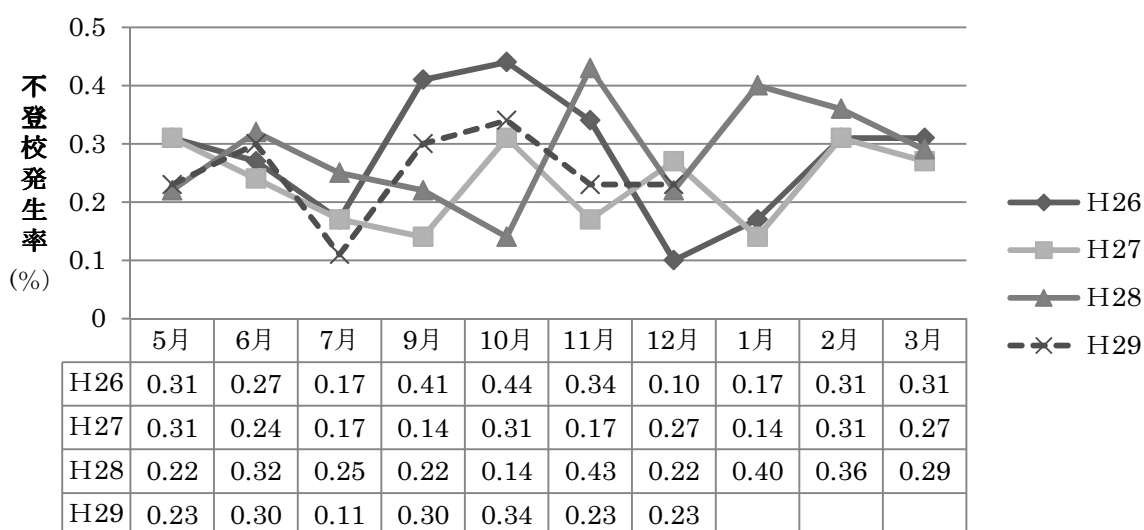
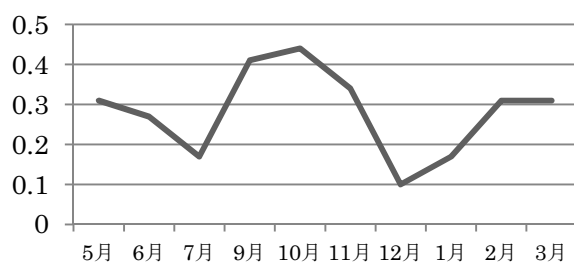


Figure 2 本市の不登校発生数

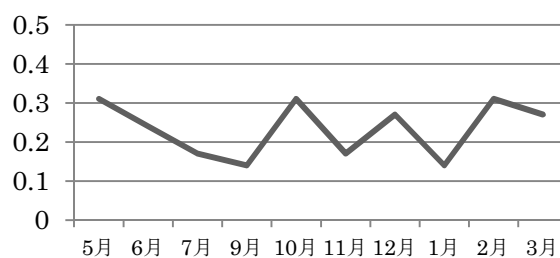
そこで、本市の中学1年生の新規不登校発生率が1年間でどのように推移しているかを示すとFigure 3の通りとなる。



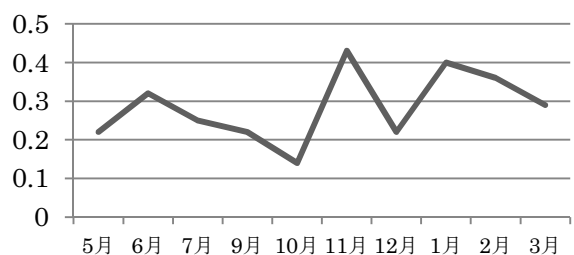
### 平成26年度



### 平成27年度



### 平成28年度



### 平成29年度

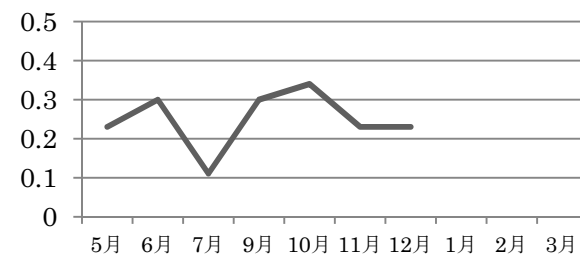


Figure 3 本市の中学1年生の新規不登校発生率の変化

Figure 3 から以下のようなことが読み取れる。第1に5月から6月頃は、前年度から不登校の生徒が30日の欠席を越すことから発生率が高くなりやすい。第2に1月から3月は、月に2日から3日欠席する生徒の累積欠席が30日に達する時期であると考えられる。どの年度も発生率が一番高くなるのは9月から12月である。この時期は、学習の内容が多岐にわたり難しくなる。また、学校行事が多くさまざまな環境の変化があると想定される。学校の内外を問わずさまざまな人と関わること

が増える時期である。めまぐるしい場面の変化に対応することに戸惑いや不安を感じる生徒も多いと考えられる。

本市では、「不登校の発生率を減少させる」ための取組の1つとして、1.1.2節で述べたように、初期対応を目的として「欠席3日目シート」を導入しているが十分な効果は現れていない。その点を踏まえて、「不登校傾向のある生徒」に対する支援方法や「欠席3日目シート」の課題を探るために小規模校A、中規模校B、大規模校Cの3校の研究協力校の1年生担当教員（18人）を対象にアンケートを行った【資料1】。その結果をFigure 4からFigure 8で示した。

教員が「不登校傾向のある生徒に対する支援方法を検討する会議や学年会」をどの程度行っているかという質問に対しては、「十分行っている」47%、「時々行っている」41%、両方を合わせると88%が「支援方法を検討する会議や学年会を行っている」と認識していることがわかる。この結果は、「不登校傾向のある生徒」に対して支援がなされていることを示している（Figure 4）。

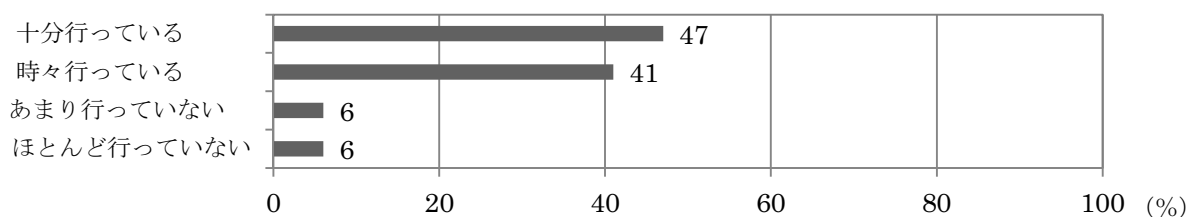


Figure 4 不登校傾向のある生徒に対して支援方法を検討しているか

生徒の累積欠席が何日になった時に「不登校傾向がある」と感じるかという質問に対しては、生徒の欠席が3日で、不登校傾向を感じる教員は11%であった(Figure 5)。

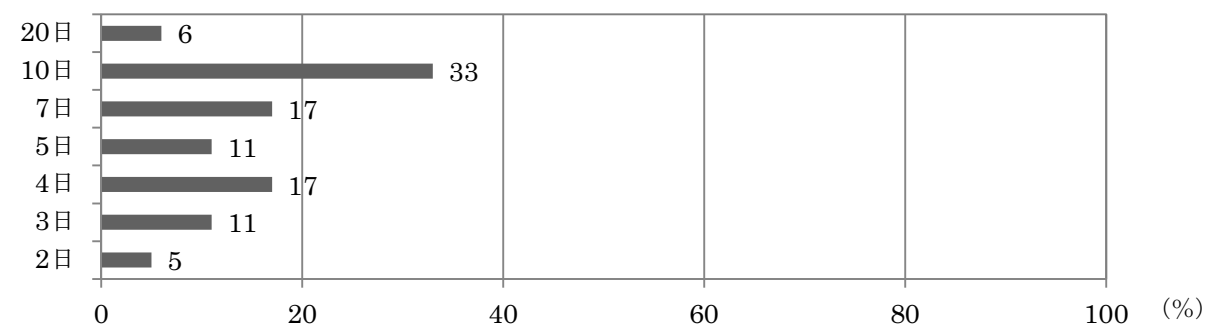


Figure 5 不登校傾向があると感じる欠席日数

「欠席3日目シートを活用できているか」という質問に対しては、「十分活用できている」が0%、「まあまあ活用できている」が22%、「あまり活用できていない」が61%、「ほとんど活用できていない」が17%と回答されており、研究協力校において、あまり活用されていないことがわかる(Figure 6)。

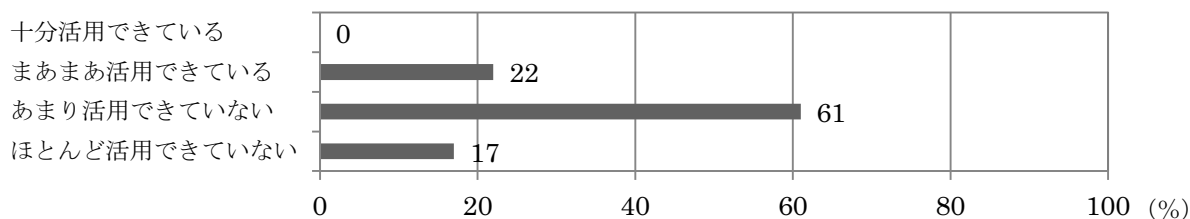


Figure 6 「欠席3日目シート」の活用について

また、「欠席3日目シート」が「あまり活用できない」「ほとんど活用できていない」と回答した14人にその理由を質問した(複数回答可)。イの「活用方法がわからない」が7人、ウの「必要性のない生徒にも作成する」が5人、「活用したいが支援方法をどう考えていいかわからない」が5人であった(Figure 7)。

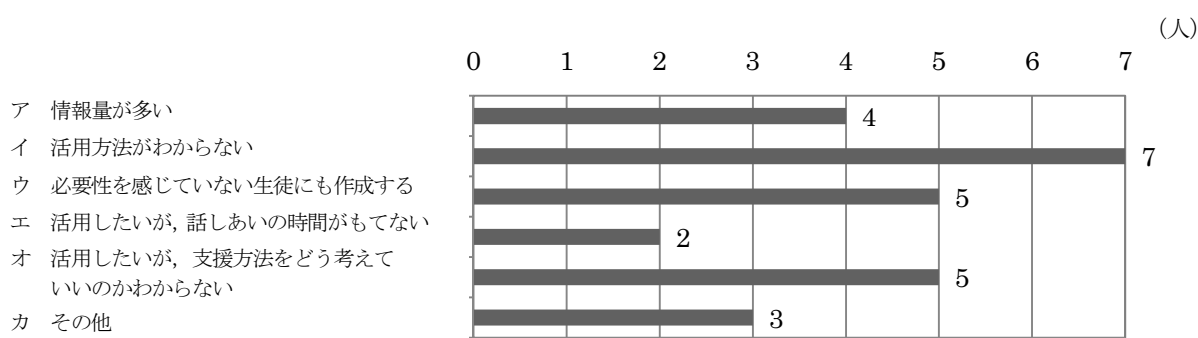


Figure 7 「欠席3日目シート」が活用できていない理由 (n=14, 複数回答)

次に、「欠席3日目シート」を「十分に活用できている」「まあまあ活用できている」と回答した4人に活用の仕方を聞いた(複数回答可)。アの「作成者が、生徒の欠席に対して意識を持つことができた」、ウの「作成者が生徒の欠席に意識をもち、家庭訪問などの行動をすることができた」と3人が回答したことから、「欠席3日目シート」が作成者の意識づけや行動のきっかけとするものとして活用されていることがわかる。一方、エの「学年の教師集団で情報を共有する」が2人、オの「学年の教師集団で支援方法を考える」が0人となっている。また、カの「学校全体で情報を共有することができた」の「学校全体で情報共有するだけでなく、支援方法を考える」は1人であった(Figure 8)。

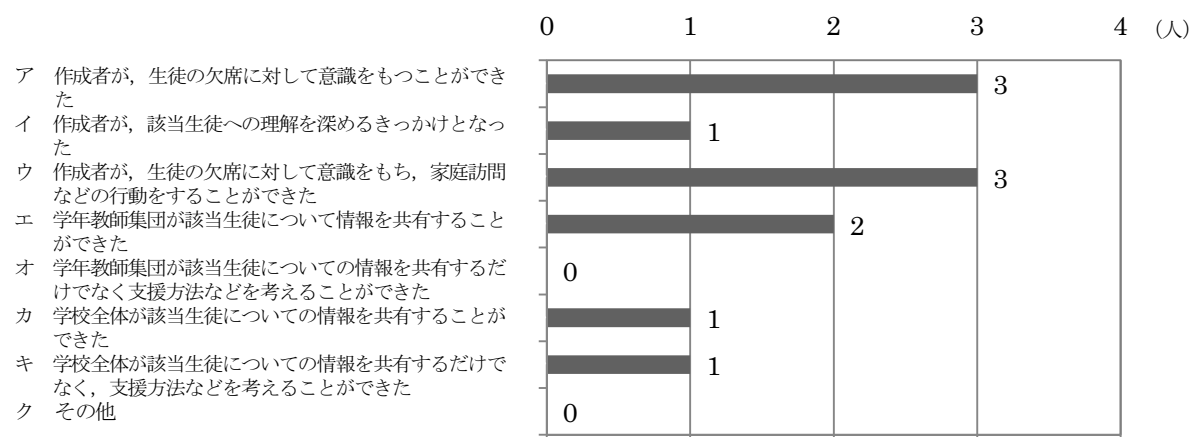


Figure 8 「欠席3日目シート」の活用の仕方について (n=4, 複数回答)

本市の中学1年生の現状と研究協力校でのアンケートの結果から、いくつかの課題が挙げられる。

1つ目は、本市でも全国と同じように中学校での新規不登校発生率が高いということである。中でも中学1年生の9月から12月が不登校の発生率が高くなっている。この時期は、前述したように学習内容が増加し、さまざまな行事がある時期である。学習や特定の行事に対して苦手意識を持っている生徒には、どのように見通しをもたせて取り組ませるか、配慮できる点はどこなのかを考える必要がある。

2つ目は、累積欠席3日の生徒を「不登校傾向のある生徒」として認識し対応する教員の割合が低いことである。先行研究では、月の累積欠席が3日の生徒に対しても「不登校傾向のある生徒」として認識し対応することで不登校発生率を減少させている。連続欠席3日の生徒だけでなく、累積欠席3日の生徒に対しても不登校傾向があるのではないかと認識して対応する必要がある。

3つ目は、「欠席3日目シート」の活用の仕方がわからないと答えた教員の割合が高いことである。シート作成後、情報をどう読み取り支援につなげるか、また、組織的に活用するにはどうするかを明確にする必要がある。

以上のことから、不登校発生率が高くなる中学1年生の9月から12月に着目し、「欠席3日目シート」の組織的な活用の方法を提示することが、不登校児童生徒の減少につながると考えた。

## 2 目的

本市の不登校発生数（Figure 2）を見ると、新たに不登校になる生徒の数が多いのは中学1年生である。このことから、中学1年生に着目することが、不登校発生率を減少させることにつながると考える。そこで、市内中学校3校に協力を依頼し、中学1年生の生徒について「不登校生徒に対する初期対応」の実践を行うことにした。

前述した先行研究では、本市で行っている連続欠席3日の生徒だけでなく、累積欠席3日の生徒に対しても「不登校傾向のある生徒」として認識し、初期対応することで不登校発生率を減少させている。シートを作成後、どこに報告し、担当がそれぞれどのような動きを行うかといったことを明確にし、組織的に対応している。

今回の研究では、現行の「欠席3日目シート」を改訂して【資料 2-1, 2-2】生徒の課題を可視化することによりアセスメントを行いやすくする。その上で生徒の課題ごとに支援例を示し、支援方法の検討に活用できるようにした。さらに、月の累積欠席3日、累積欠席10日に達した場合どのように組織が動くかという支援体制を提示した【資料 3-1, 3-2】。また、研究協力校とともに、生徒の欠席管理を行い、学年会で「改訂欠席3日目シート」を作成した生徒で不登校になるリスクが感じられる生徒に対しての助言を行うことにした。そして本研究では、

1. 「改訂欠席3日目シート」が活用できたと感じる教員の割合が増えるかどうか。
2. 組織的に支援するために「改訂欠席3日目シート」がうまく活用できたと感じる教員の割合が増えるかどうか。
3. 教員が「改訂欠席3日目シート」を活用することで不登校の初期対応に効果があると感じるか

うか。

4. 過去3年間と今年度を比較して、不登校発生率が減少するかどうか。

以上4点を明らかにする中で、「改訂欠席3日目シート」の改良すべき点、また、組織的に支援を行うために何が必要であるかといったことを分析する。なお、具体的な研究の流れはTable 3の通りであった。事前アンケートは8月、事後アンケートは12月に実施した。

Table 3 学校の動きと適応指導教室の動き

月	適応指導教室	協力校
8月	●事前アンケートの依頼	●事前アンケートの記入
9月	<b>1.ケース会議への参加</b> ●「改訂欠席3日目シート」の作成支援、アセスメント・支援方法の検討についての助言 *出席簿を確認し、漏れがある場合は追加で作成を依頼	●「改訂欠席3日目シート」の作成（月の累積欠席3日・リスク群） ●適応指導教室への報告（随時） ●ケース会議の開催
	<b>2.学年会への参加</b> ●支援の結果、生徒の現状についての聞き取り ●今後の支援の提案・助言 ●9月までの支援の評価	●経過観察 ●シート作成の必要性があると判断された場合「改訂欠席3日目シート」の作成 ●学年会（支援方法の検討）
	<b>3.「月3日」の欠席が出なかった場合</b> 「気になる生徒の抽出」⇒支援方法についての助言・出席簿・小中不登校連携シートの確認	●情報共有
10月	<b>1.ケース会議への参加</b> ●「改訂欠席3日目シート」の作成支援、アセスメント・支援方法の検討についての助言 *新たに欠席数が気になる生徒はいないかなどの確認	●「改訂欠席3日目シート」の作成（月の累積欠席3日・リスク群） ●適応指導教室への報告（随時） ●ケース会議の開催
	<b>2.学年会への参加</b> ●支援の結果、生徒の現状についての聞き取り ●今後の支援の提案・助言 ●10月までの支援の評価	●経過観察 ●シート作成の必要性があると判断された場合「改訂欠席3日目シート」の作成 ●学年会（支援方法の検討）
11月	<b>1.ケース会議への参加</b> ●「改訂欠席3日目シート」の作成支援、アセスメント・支援方法の検討についての助言 *新たに欠席数が気になる生徒はいないかなどの確認	●「改訂欠席3日目シート」の作成（月の累積欠席3日・リスク群） ●適応指導教室への報告（随時） ●ケース会議の開催
	<b>2.学年会への参加</b> ●支援の結果、生徒の現状についての聞き取り ●今後の支援の提案・助言 ●事後アンケートの依頼 ●9月からの支援の評価の聞き取り	●支援の評価・見直し ●学年会（支援方法の検討）
12月	●事後アンケートの依頼	●事後アンケートの記入

### 3 方法

#### 3.1 調査対象・調査期間

四日市市内の研究協力校3校の中学校1年生（連続欠席3日、月の累積欠席3日、累積欠席10日以上）と中学校1年生を担当する教員18人を調査対象とし、平成29年7月から12月にかけて調査

を行った。研究協力校は、1年生の生徒数100人以下の小規模校A校、150人以下の中規模校B校、150人以上の大規模校C校を対象とした。

### 3.2 調査方法

研究協力校の中学校1年生の担当教員18人に対して、事前（8月）と事後（12月）【資料4】の意識調査のデータを収集し、「改訂欠席3日目シート」を活用できていると感じた割合、また、生徒の支援が組織的に行えたと感じる教員の割合を比較する。また、平成29年度と過去3か年の不登校発生率（4月～7月まで、4月～12月まで）の変化を比較、分析をする。

現行の「欠席3日目シート」は児童生徒の情報を入力するのみである。「改訂欠席3日目シート」は、児童生徒の情報を入力すると、別シートに「生徒個別支援シート」が作成される仕組みになっている。「生徒個別支援シート」は、本市の研究をもとに作成したものである。不登校のリスクがあると思われる生徒について「1.性格、2.行動、3.学力、4.友人関係、5.家庭状況」といった5つの側面からチェックすることができるようになっている。その結果から、支援が必要な時期がいつであるのか、支援の具体的な内容を教員で共有し評価する支援シートに改訂した。また、生徒の状況をそれぞれの教員が把握し、「早急に話し合い、具体的な支援を考える」必要がある生徒にはA、「今まで以上に注意深く様子をみて、欠席日数や状態に気をつける」必要がある生徒にはB、「今のまま様子をみていくが、変化がないかを注意する」にあてはまる生徒にはCの記号をつける欄を設けた【資料2-2】。

### 3.3 研究計画

研究計画はTable4の通りである。

Table 4 研究計画

月	本研究に関する計画	実施する内容
4	研究計画立案	●今後の調査の方向性の検討
5	第1回課題研究会議 第2回課題研究会議	●教員対象のアンケートの作成 ●「欠席3日目シート」の改訂
6	第3回課題研究会議	●教員対象のアンケートの作成 ●「欠席3日目シート」の改訂
7		●研究協力校への依頼・説明
8		●教員対象の事前アンケートの実施・回収 ●「改訂欠席3日目シート」と支援計画シートの配布
9	第4回課題研究会議	●研究協力校において、「改訂欠席3日目シート」の使用
10	第5回課題研究会議	●支援の方向性・支援方法の見直し
11	第6回課題研究会議	●支援の方向性・支援方法の見直し ●支援計画シートの回収
12	第7回課題研究会議	●教員対象の事後アンケートの実施・回収 ●アンケートの結果の分析 ●不登校発生率等の分析
1	第8回課題研究会議	
2	第9回課題研究会議	

## 4 結果

### 4.1 事前・事後の調査の比較

研究を行う事前と事後に行った教員のアンケート結果を比較した。生徒の累積欠席3日で、不登校傾向を感じる教員の割合は、事前のアンケートでは、11%であったが事後のアンケートでは、33%に増加した。また、累積欠席が10日と答える教員の割合は39%であった (Figure 9)。

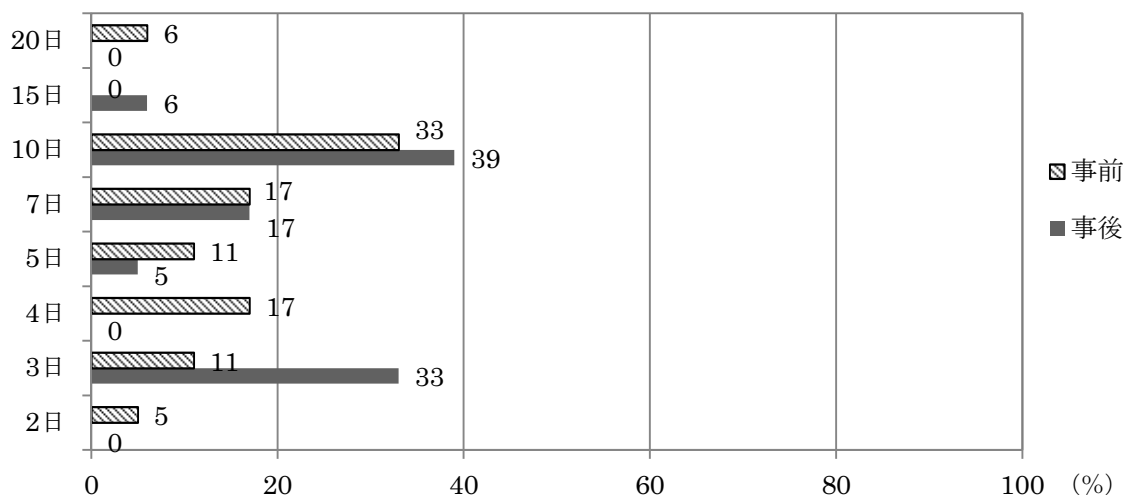


Figure 9 不登校傾向があると感じる欠席日数 (事前・事後)

次に、「欠席3日目シート」の活用については、「ほとんど活用できていない」の割合が事前の結果の17%から事後は6%になり、「まあまあ活用できている」は事前の結果22%から事後は33%になった。「あまり活用できていない」の割合は依然として61%であった (Figure 10)。

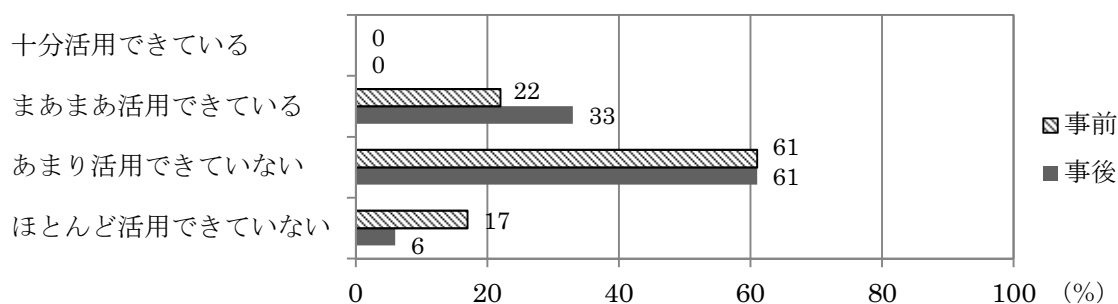


Figure 10 「欠席3日目シート」が活用されているかについて (事前・事後)

また、「欠席3日目シート」を「十分活用できている」「まあまあ活用できている」と回答した教員 (事前4人, 事後6人) 6人を対象に活用の仕方について回答を求めた (複数回答可)。事前のアンケートでは、オの「学年教師集団が該当生徒についての情報を共有するだけでなく、支援方法などを考えることができた」は0人であったが、事後のアンケートでは6人となった。また、エの「学年教師集団が該当生徒について情報を共有することができた」は事前のアンケートでは3人だったが、事後のアンケートでは6人であった。また、カの「学校全体が該当生徒について情報を共有することができた」キの「学校全体が該当生徒について情報を共有するだけでなく、支援方法などを考えることができた」は事前ではそれぞれ1人だったが、事後では2人になった (Figure 11)。



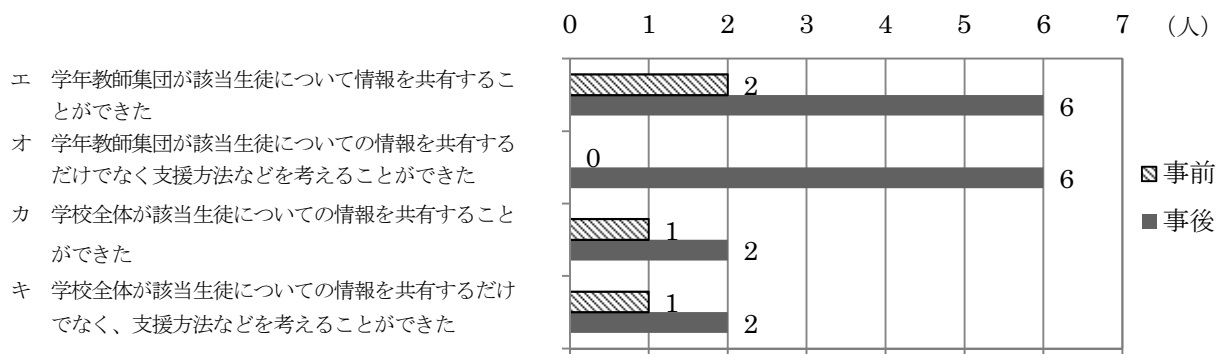


Figure 11 「欠席3日目シート」がどのように活用されているかについて

最後に「欠席3日目シート」を「あまり活用できていない」「ほとんど活用できていない」と回答した教員、事前14人、事後12人に、改めてシートが活用できない理由を質問した（複数回答可）。オの「活用したいが、支援方法をどう考えていいかわからない」と回答した人数が事前では5人だったが事後では2人だった。「必要性を感じていない生徒にも作成する」と回答した人数は事前、事後とも5人だった（Figure 12）。

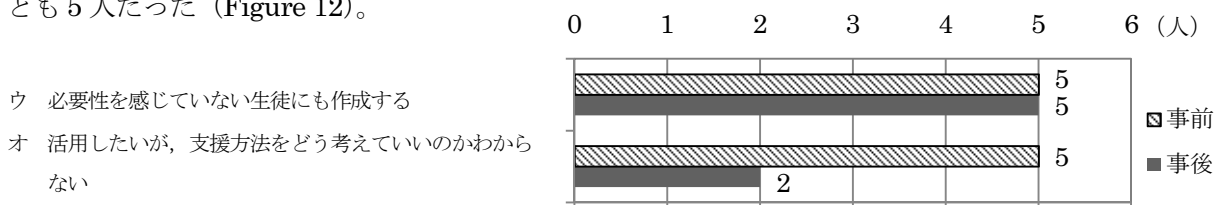


Figure 12 「欠席3日目シート」が活用できない理由について

## 4.2 支援の効果

次に、今回の取組で行ったものが不登校傾向のある生徒への支援としてどの程度有効であったかという質問に対する回答を示した。オの「適応指導教室による生徒の見立て・支援方法への助言」が「有効であった」と回答した割合が高かった。また、ウの「学年会での支援方針の検討」が「やや有効であった」という割合が高かった。一方、イの「学年会の開催の有無を決定するために生徒個別支援シートを用いたこと」は、「あまり有効ではなかった」「有効ではなかった」の割合が高かった（Figure 13）。

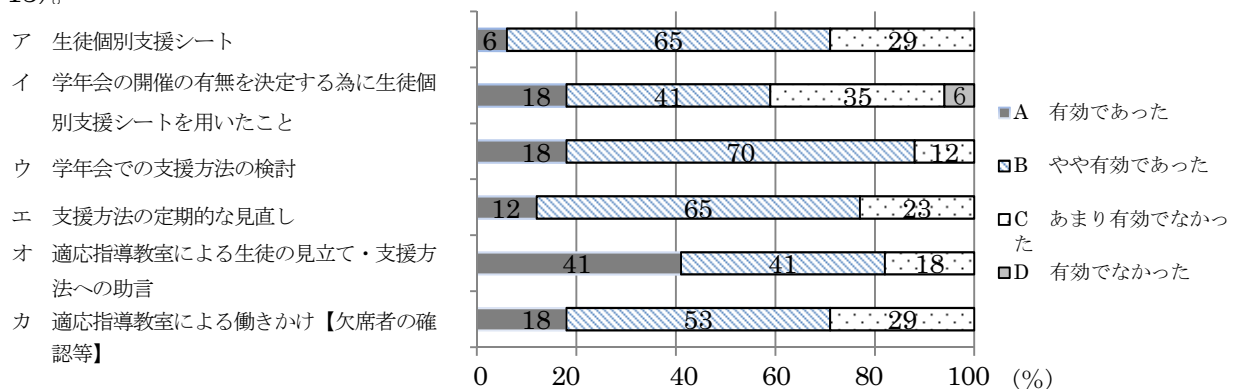


Figure 13 取組のそれぞれの効果について

### 4.3 研究協力校の不登校発生率の推移

まず、研究協力校の1年生の過去4年間の不登校発生率の推移をグラフに示した。平成28年度A校では、4月から7月と4月から12月を比較すると10.8%増加、B校では、0.9%増加している。しかし、平成29年度は両校とも増加していない。C校では、平成28年度は4月から7月と4月から12月を比較すると増加してないのに対して、平成29年度は1.7%に増加した。

研究協力校において、4月から12月までで中学校で初めて不登校になった生徒は、平成28年度は5人であったが、平成29年度は1人であった（Figure 14）。

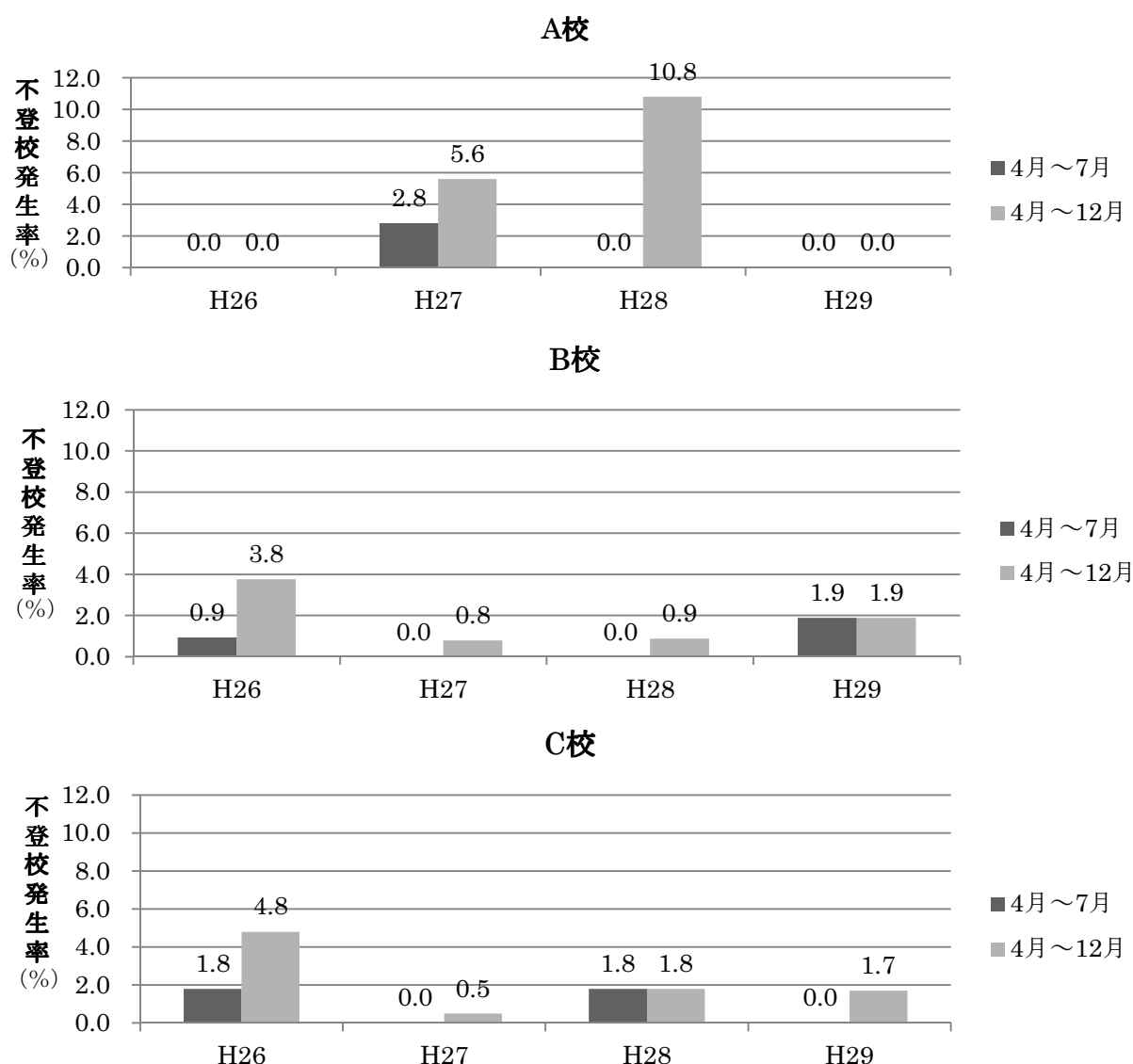


Figure 14 研究協力校の中学校1年生不登校発生率

### 4.4 研究対象生徒

A校では、研究対象生徒は1人であった。9月の累積欠席は3日であったが、その後は月に数日の欠席があるものの不登校にはなっていない。9月の累積欠席3日になった時点で初期対応が行われ、

学校全体の情報共有も早い段階で行われた。その後の支援計画も時期と内容を確認し、学校全体で支援を行った効果があったと考えられる。定期的に適応指導教室が学年会に参加し、支援の評価や翌月の支援内容を確認した。

B校では、9月の時点ですでに累積欠席30日以上の状態の生徒が3人いた。初期対応の段階にある生徒ではないので、今回の研究の対象にはならないが、適応指導教室の指導員が学年会等に参加し、学校の支援と他機関の連携について助言するとともに、定期的に生徒の様子を聞き取った。

C校では、「改訂欠席3日目シート」を作成した生徒は4人である。しかし、そのうち3人は欠席理由が病気等だったため、研究対象生徒は1人であった。該当生徒は、9月の時点で累積欠席10日になり、学年会が行われた。その際、適応指導教室の指導員も参加し、助言を行った。12月末の時点で累積欠席30日以上になったが、その後も支援計画を立て支援を継続している。なお、「改訂欠席3日目シート」を作成しなかった生徒で、不登校になった生徒が2人いた。この2人の生徒の支援については、学年会ではなく、支援委員会で話し合われた。そのため、「改訂欠席3日目シート」の作成対象にはならなかった。3校で行った支援の内容と適応指導教室からの助言、その後の結果等の一部を【資料5】に示した。

#### 4.5 教員への聞き取り調査の結果

教員の聞き取り調査の結果より、「改訂欠席3日目シート」については、従来のものより支援を考える際にわかりやすく、使いやすいといった意見があった。一方、シートの項目の多さや、作成する時期、活用方法については疑問視する意見もあがった。

「学年会・ケース会議」については、さまざまな見立てができ、支援方法が統一できたという意見があった。一方、学年会で検討してもなかなか支援方法が定まらないケースや累積欠席3日の生徒を対象に学年会を行うのは早すぎるのではないかといった意見があった。教員の聞き取り調査であげられた意見は以下 Table 5 に示す。

Table 5 教員からの聞き取り調査

改訂欠席3日目シートについて
<ul style="list-style-type: none"><li>・今までは、紙ベースのシートだったが、電子化されたことにより保存や回覧がしやすくなった。</li><li>・担任以外がチェックするシステムになっていてよかった。</li><li>・A, B, Cをつけることで、学年全体でその生徒について注意してみることができる。</li><li>・該当生徒の状況を整理することができる。</li><li>・チェック項目が多いものの支援計画シートに情報が絞られるので、生徒の見立てがしやすかった。</li><li>・支援計画シートの情報がすっきりしていて見やすい。</li><li>・シートを作成し、会議を行ったがシートの扱いがいまひとつわからない。</li><li>・欠席3日目シートがなくても生徒の情報交換はできるので、シートがあるからこそ有効な話し合いが持てる工夫がほしい。</li><li>・記入して終わりになっていた。回覧ができなかった。</li><li>・欠席3日目シートの項目には、不必要だと思われる項目がある。</li></ul>

#### 学年会・ケース会議について

- ・学年会で話しあうことで、支援の方向性を統一することができた。
- ・担任だけではなく、情報や支援方法を共有できたことで、一緒に取り組んでいるという感じももてた。
- ・学年会で検討したものの、家庭環境の困難さがある生徒についての支援については、学校だけでは対応しきれない。
- ・学年会を欠席 3 日や 10 日に達したタイミングですぐ行うことはできなかった。
- ・適応指導教室指導の客観的な意見が入ることで別の見立てや具体的な支援方法について助言がもられたのがよかった。

## 5 考察

研究協力校の新規不登校発生率の推移、対象教員の事前と事後のアンケートの比較、教員の聞き取り調査の結果から以下のように考察した。

### 5.1 研究協力校の不登校発生率の推移

4. 3 で述べたように、9 月から 12 月までの不登校発生率を今年度と過去 3 年間で比べると概ね増加の割合が低かった。しかし、それが「欠席 3 日目シート」の改訂によるものか、他の取組によるものかは検証できなかった(Figure 13)。それぞれの取組が相乗的に働いて、9 月から 12 月までの不登校発生率を概ね抑えることに繋がったのではないかと考えられる。

### 5.2 教員の意識の変化

事前のアンケートでは、累積欠席 3 日で「不登校傾向のある生徒と感じる」と回答した教員の割合が 11%であったが、事後のアンケートでは、その割合が 33%に増えた。次に多かったのは累積欠席 10 日で 39%であった。不登校傾向であると認識する欠席日数が累積欠席 3 日または累積欠席 10 日に集中したことは、職員間の意識の統一や組織的な対応が行われるようになったためと言えよう。

「累積欠席 3 日」と感じる割合が増えた理由としては、「累積欠席 3 日」という基準で情報を共有することで、その生徒に対して教員間で共通の認識を持つということにつながっていると考えられる。生徒の欠席日数に敏感になり、出欠の状況を確認することは、前述した熊谷市で行われた取組でも、不登校の発生率を減少できたという効果が示されていた。同じ累積欠席 3 日であっても昨年度の欠席日数がどうであったかによって初期対応の内容も変わってくる。欠席の内容も「毎週月曜日に休むのか」「特定の授業や行事の前に休むのか」などの分析が必要である。今後は、連続欠席 3 日だけでなく累積欠席 3 日にも敏感になることで初期対応が早期に行われるのではないかと考える。3 日に注目することで、その後の欠席日数や欠席内容に対しても敏感になることができる。

次に、「累積欠席 10 日」で不登校傾向であると感じる割合が増えた理由としては、本研究で「累積欠席 10 日」で学年会を行うという基準を設けたことがあると考える。実際、累積欠席 10 日の生徒が対象になったことで、A校では早期にその生徒が不登校傾向であると気づき、具体的な支援について

話し合い、支援計画を考えることができた。

## 5.3 校内体制の検討

### 5.3.1 情報の共有

「欠席3日目シート」を「ほとんど活用していない」という割合が事前アンケートに比べて事後アンケートでは減少し、「まあまあ活用している」の割合が増加した。教員の聞き取りから、「学年全体でA, B, Cをつけて回覧できるのはよかった」「該当生徒の状況を把握するのによかった」という意見からも情報共有ツールとしての役割は果たせた。また、C校では、「まあまあ活用できた」と答えた割合が高かったことから、大規模校の方が小規模校に比べ、情報共有のためのツールの必要性が高いと考えられる。

しかし、半数以上の教員が「あまり活用できていない」と感じていた。その主な理由は、「活用の方法がわからない」というものであった。共有した情報からどのように生徒の情報を読み取るのかを具体的に示すことができなかつたことからこのような結果になったと考える。

### 5.3.2 支援方法の検討

支援方法の検討については、従来は「欠席3日目シート」に情報を入力するものの、支援の計画につなげていくような取組は少なかった。しかし、今回の研究では「改訂欠席3日目シート」に、必要な情報を入力すれば「個別支援計画シート」に情報が抽出され、課題が反映される仕組みを付加した。そのことにより、どこに注目して支援を考えればよいかが明確になった。また、「個別支援計画シート」を回覧する際に各教員の見立てを記入する欄を設けた。それぞれの教員の見立てを知ることができ、共通の認識を持つきっかけになったことが推察される。また、「個別支援計画」を作成することで、何を目的に対象生徒を支援しているかを確認することができ、支援の方向性が揃えられたのではないかと考えられる。

事後アンケートで、「まあまあ活用できた」という教員の活用の仕方に注目すると、事前アンケートに比べ「学年教師集団における情報の共有」だけでなく、「支援方法」を考えるのに活用できたという回答が増加している。活用方法を、具体的に示したことで、「改訂欠席3日目シート」が情報共有のツールとしてだけでなく、支援方法を考えるツールとして活用されたことがわかる。

岩手県立総合教育センター（2010）では、学校側が生徒の見立てを行ったものの有効な対応策を見出せずにいるケースに対して「見立ての基本モデル」を示したり、熊谷市（2009）が、累積欠席3日の児童生徒に対して、支援方法を助言したりしている。今回の研究においても、「改訂欠席3日目シート」の支援例や適応指導教室の指導員の助言が、生徒を支援するうえで有効に働いたと考えられる。

### 5.3.3 校内支援体制の機能化

今回の研究では、適応指導教室が校内支援体制の流れを提案した。「改訂欠席3日目シート」の作成、生徒のアセスメント、学年会でケース会議といった一連の支援の流れのマニュアルを提案したこ

とで、不登校の初期対応の機能化が進み、支援が円滑に行われた研究協力校もあった。また、適応指導教室が適宜介入し、欠席状況の確認、学年会へ参加することで学校として今後行うことの確認、目標の設定、支援の見直しなどを促すように促したことも効果につながったと考えられる。

福岡市教育センター（2016）の研究結果では、既存の組織を工夫・改善して校内支援モデルを構築し、その校内支援モデルに沿って取り組み、教員の中に不登校の初期対応の流れを共有したことで、支援体制の機能化と役割の明確が周知されたことが示されている。本研究の対象校でも同様の取組が行われたと考えられる。

なお、【資料 6】に示した A 校の支援体制に見られるように、小規模校の場合は、学年会をすぐに持つことができ、情報共有だけでなく支援方針も共有しやすいという点がある。しかし、中規模校 B 校、大規模校 C 校で行う場合、「改訂欠席 3 日目シート」が作成されたすべての生徒に対して、担当の教員が全員で話し合いを行うというのは、難しい状態である。そのことから、学年主任、教育相談担当、担任といった少人数であらかじめ組織的な支援の必要性の有無を検討した上で、学年会や支援委員会を持つといった支援体制が適していると言えよう。学校規模によって、より良い支援体制の在り方は異なると考えられるため、今後そういった観点からも「改訂欠席 3 日目シート」の活用の仕方について考えていく必要がある。

#### 5.4 今後の課題

課題としては、「改訂欠席 3 日目シート」の各項目の情報が不登校の初期対応に有効に働く情報か否かの検証が不十分であるという点が挙げられる。本研究で、欠席 3 日に達した時点でシートを作成したが、担任がチェックを入れた項目が少なく、生徒をアセスメントするために必要な情報が十分に得られなかった。そのため、「改訂欠席 3 日目シート」の情報だけでは「生徒個別支援シート」を作成できなかった。「改訂欠席 3 日目シート」の項目が生徒のアセスメントを行うことに適しているかは、今後、教員への聞き取りを行うなどして精査していく必要がある。

また、「改訂欠席 3 日目シート」を活用できない理由として「必要のない生徒に作成する」「活用の仕方がわからない」という項目の割合が高いことは課題である。事前に欠席理由が明らかな生徒についてはシートを作成しなくてもよいと伝えてあったが、そのことが周知されていなかったこと、また作成の有無の判断が難しいといったこと、さらにシートの情報の活用方法を丁寧に提示しなかったことが原因と考えられる。

次に、初期対応が指し示す内容について、教師間でその理解が異なることが、本研究の過程で見られた。教員への聞き取りでは、生徒の欠席理由に曖昧なところがある場合、電話連絡や家庭訪問はなされており、それを初期対応だとは感じずに自然に対応している教員が多いと考えた。本研究によって、支援方法などを考える会議などを持つことが本格的な初期対応だと感じたようである。最初に行う、「電話」や「家庭訪問」からすでに初期対応は始まっていると意識をもって取り組むことでさらにその後の支援につながると考えられる。

また、生徒の欠席管理が継続的にできていなかったことが挙げられる。例えば、「小中不登校連携シ

ート」の有無が確認されておらず、「累積欠席 10 日」に達したことに気づくのが遅くなったということがあった。「改訂欠席 3 日目シート」を 1 度作成した生徒に対しては、より注意深く様子を観察する必要があるため、欠席日数を管理する役割を学年内で設けるというのも一つの方法であろう。

文部科学省（2016）は、「各分掌の役割を理解し、児童生徒の見取りや関係者への情報伝達を行うコーディネーターの存在が重要である」と指摘している。今回、「改訂欠席 3 日目シート」が作成され「個別の支援シート」が学年全体に回覧されるまでに時間がかかるといった課題があった。その点からも、情報の伝達を円滑に行うコーディネーターの存在は必要であると言える。例えば、教育相談担当が中心となって、各学年に前述の役割を行う担当を決め、校内体制の中で明確化することで、円滑に情報が伝達されるのではないかと考える。

本研究では、各校における生徒の見立てと支援の在り方について、適応指導教室が客観的な視点から助言を行った。不登校対応の事例を多く持っている適応指導教室が、通級している生徒に対する不登校対応の経験をもとに助言することは、学年の教師が生徒の特性に目を向けたり、具体的な支援方法を考えたりする上で有効に働いた。今後、適応指導教室が持っている支援のノウハウを具体的に市内全ての学校に広めていくことが今後の課題と言える。今後、不登校対応についての知識を多くの教員が身に付けられるような研修の場が必要であると考ええる。

## 引用文献

- 明石市教育委員会(2012). 不登校予防のための早期対応システムー「ストップ不登校あかし」ー  
福岡市教育センター チームマネジメント研究室(2016). 不登校の未然防止に向けた組織的な支援の  
在り方ー既存の校内体制の機能化と役割の明確化を通してー 平成 28 年度研究報告書, 997, 1-8.
- 古川 雅文・小泉 令三・浅川 潔司(1992) 小・中・高等学校を通じた移行 山本多喜司・S ワツプ  
ナー(編) 人生移行の発達心理学 北大路書房
- 久下 弘子(2013). 不登校未然防止のために学校でできる個別の支援ー早期発見のシステムづくりと  
自尊感情を高める取組ー 大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター紀要, 31, 89-104.
- 岩手県立総合教育センター(2010). 不登校を中心とした学校不適応事例の見立てに関する一考察平  
成 21 年度(第 53 回) 岩手県教育研究発表会資料. 1-19.
- 川崎市総合教育センター(2015). 不登校の問題行動の未然防止と初期対応のあり方ー課題を見出し、  
解決策を探るー 研究紀要, 29, 14-17.
- 小林 正幸(2007). 不登校半減計画の実際と成果ー不登校問題予防の最前線ー 吉備国際大学臨床心  
理相談研究所紀要, 4, 77-89.
- 小林 正幸(監修)・早川 恵子・大熊 雅士・福島 賢和(編集)(2009). 学校でしかできない不登校  
支援と未然防止ー個別支援シートを用いたサポートシステムの構築ー 東洋館出版社
- 文部科学省(2016). 不登校児童生徒への支援に関する最終報告ー一人一人の多様な課題に対応した  
切れ目のない組織的な支援の推進ー
- 文部科学省(2017). 平成 28 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査(速報値)
- 大石 英史(2005). 不登校の今日的傾向と「初発対応」の重要性 山口大学研究論叢: 芸術・体育・  
教育・心理 55, 227-238.
- 只石 展英・石津 憲一郎・下田 芳幸(2012). 欠席の要因と不登校の未然防止ー欠席日数に影響を与  
える要因ー教育実践研究: 富山大学人間発達科学研究実践総合センター研究紀要, 6, 87-96.
- 四日市市教育支援課(2017). 不登校を未然に防止するための校内支援の研究ー学級不満足群の生徒  
に焦点をあててー研究調査報告, 403, 1-29.



不登校への初期対応に対するアンケート 【事例】

四日市市適応指導教室

不登校の初期対応にどのような取り組みを行っているかを教えてください。

【担当学年 年・担任・副担任】

問1 「生徒が不登校傾向」ではないかと感じるのは、累積の欠席日数何日になった時ですか。  
( 日)

問2 「生徒が不登校傾向」ではないかと感じ、初期対応を始めるのは累積の欠席何日目からですか。  
( 日) (家庭訪問や学年間での相談等)

問3 「欠席3日目シート」は活用できていますか。

- (1)十分活用できている 問4へ
- (2)まあまあ活用できている
- (3)あまり活用できていない 問5へ
- (4)ほとんど活用できていない

問4 問3で「(1)十分活用できている」「(2)まあまあ活用できている」と答えられた方に質問です。記入することによって活用していますか。(該当するものにすべて○をつけてください)

- ア 作成者が、生徒の欠席に対して意識を持つことができた
- イ 作成者が、該当生徒への理解を深めるきっかけとなった
- ウ 作成者が、生徒の欠席に対して意識をもち、家庭訪問などの行動をすることができた
- エ 学年教師集団が該当生徒について情報を共有することができた
- オ 記入することで、学年教師集団が該当生徒についての情報を共有するだけでなく、支援方法などを考えることができた。
- カ 学校全体が該当生徒についての情報を共有することができた
- キ 学校全体が該当生徒についての情報を共有するだけでなく、支援方法などを考えることができた
- ク その他

問5 問3で活用できていないと答えられた方に質問です。活用できていない理由は何ですか。(該当するものにすべて○をつけてください)

- ア 情報量が多くて、何に注目したらよいかわからないから
- イ 書いたあとの活用方法がわからないから
- ウ 必要性を感じていない生徒にも作成しなければならぬから

- エ 活用したいと思うが、話し合いなどの時間を持つことが難しいから
- オ 活用したいと思うが、支援方法をどう考えていいかわからないから
- カ その他

問6 あなたの学校では、「不登校傾向のある生徒」に対する支援方法を検討する会議や学年会等を行っていますか。

- (1) 十分行っている (2) 時々行っている
- (3) あまり行っていない (4) ほとんど行っていない

問7 あなたの学校では、「不登校の生徒」(欠席30日以上)に対する支援方法を検討する会議や学年会等を行っていますか。

- (1) 十分行っている (2) 時々行っている
- (3) あまり行っていない (4) ほとんど行っていない

問8 現在の3日目シートの良い点、良くない点を教えてください。

【良い点】

【良くない点】

問9 昨年度10日以上欠席した生徒を把握していますか。

- \*担任している生徒について (担任の先生のみ)
  - (1) 把握している (2) 一部は把握している (3) まったく把握していない
- \*担当している学年の生徒について
  - (1) 把握している (2) 一部は把握している (3) まったく把握していない
- \*学校に在籍している生徒について
  - (1) 把握している (2) 一部は把握している (3) まったく把握していない

問10 問9で「(1)把握している」「(2)一部は把握している」と答えられた方は何をを使って把握しましたか。

- ア 3日目シート イ 小中不登校連携シート ウ 指導要録 エ 小中連絡会
- オ その他 ( )

ご協力ありがとうございました。





学年会・校内支援委員会等の取組

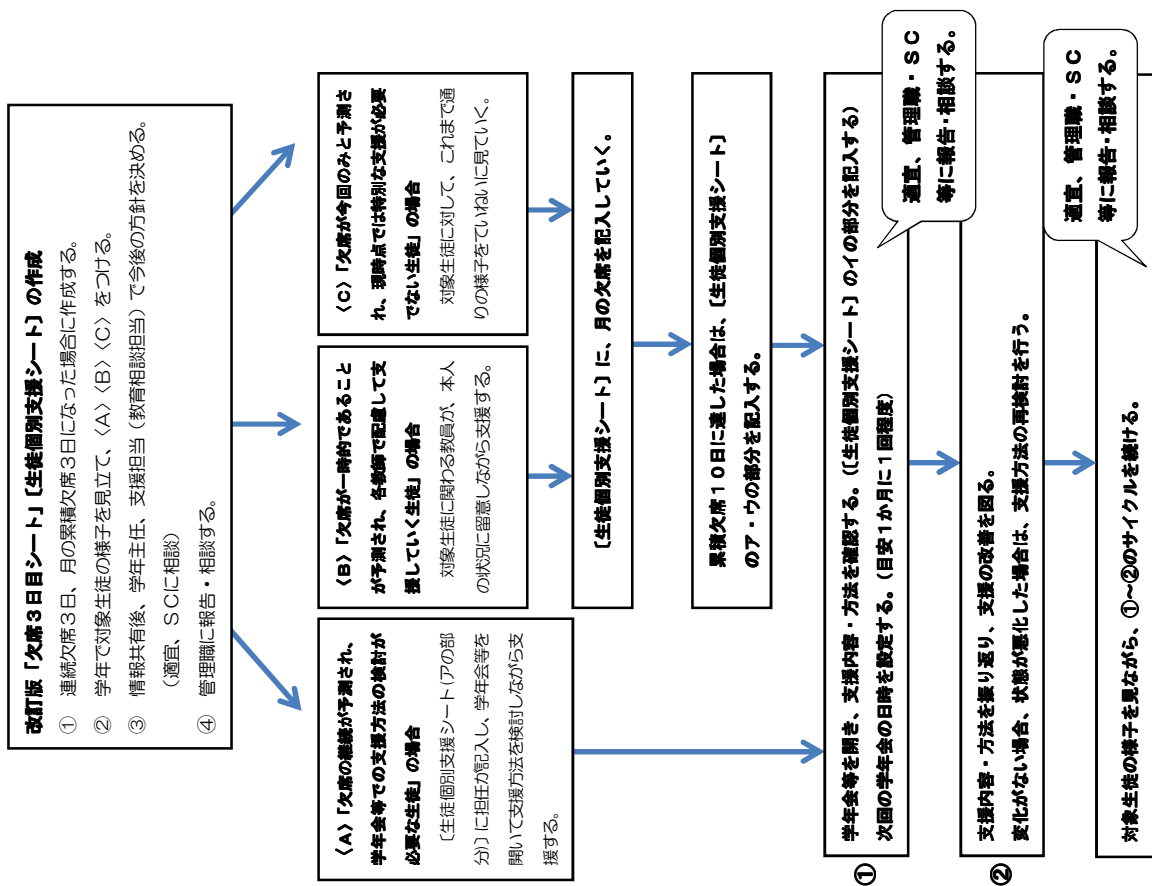
(以下は、学年会の例)

	取組内容
開催前に	<ul style="list-style-type: none"> <li>改訂版「欠席3日目シート」(生徒個別支援シート)で事前に情報共有を行う。</li> <li>改訂版「欠席3日目シート」(生徒個別支援シート)の支援例を参考に支援計画を考える。(シートのア・イまで記入する)</li> </ul>
日時を設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>日時の設定、進行は、学年主任または支援担当(教育相談担当)で行う。</li> <li>短時間での設定を基本とする。(10分以内を目安に)</li> </ul>
学年会	<p>(検討事項)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>担当が事前に立てた支援計画を基に、以下の視点で支援内容・方法を検討する。                     <ul style="list-style-type: none"> <li>いつ、どの場面で、誰が誰に、どのような支援・指導を行うのか。</li> <li>役割分担(背中を押す役、受け入れる役)。</li> <li>どうなれば成果があったとするとするのか(目標を決める)等。</li> </ul> </li> </ul> <p>&lt;例&gt;・本人、保護者にどのような声掛けをするのか(依頼内容を含む)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本人への課題(宿題)の調整(全体のバランスを見て)。</li> <li>指導をするべきこと、支援をするべきこと。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>次回の学年会等(支援の「振り返り」を行う日時)を設定する。(目安1か月程度)</li> </ul>
学年会後	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒と関わりのある教員で、学年会等に参加できなかった教員には、学年主任または支援担当(教育相談担当等)が、支援の方針(いつまでに、何を、どのように)を説明する。</li> <li>次回の学年会等までに、変化があった場合は随時学年会等を行う。</li> </ul>
次の学年会	<ul style="list-style-type: none"> <li>支援内容・方法の振り返りを行う。</li> <li>支援の成果を確認し、支援方法の改善を行う。</li> <li>生徒個別支援シートに加筆する。</li> </ul> <p>シートが足りなくなかった場合は、ファイル名に日をつけて新たなファイルを作る。 支援計画の部分だけ上書きする。</p>

【支援体制】

- 改訂版「欠席3日目シート」の作成  
連続欠席3日の生徒及び月の累積欠席3日の生徒を対象として作成する。
- 改訂版「欠席3日目シート」による生徒の課題の現状分析  
改訂版「欠席3日目シート」内にある〔生徒個別支援シート〕の形式に従って、担当が入力する。
- 入力後、改訂版「欠席3日目シート」〔生徒個別支援シート(前半部分)〕の情報を3日以内に学年及び管理職・教育相談担当で共有する。  

ファイルに「共有」をかけ、改訂版「欠席3日目シート」にいつでもアクセスできるようにショートカットを作成しておく。
- 学年の教員は、対象生徒が、以下の〈A〉〈B〉〈C〉のどの状態であるのか見立てをし、〔生徒個別支援シート〕の「見立て」欄に記入する。  
 〈A〉「欠席の継続が予測され、学年会等での支援方法の検討が必要な生徒」  
 〈B〉「欠席が一時的であることが予測され、各教師で配慮して支援していく生徒」  
 〈C〉「欠席が今回のみと予測され、現時点では特別な支援が必要でない生徒」
- 各教員の「見立て」を基に、学年主任、教育相談担当、管理職で対象生徒が〈A〉〈B〉〈C〉のいずれかを判断し、今後の支援の方向性を示す。(数ではなく、総合的に判断する)
- 〈A〉の場合は、学年会等を開き、支援シートの「支援例」を参考に支援方法を考える。
- 〈B〉〈C〉の場合であっても、累積欠席10日に達した場合は学年会等を開き、支援方法を検討する。



問8 今回の取組で行った、不登校傾向のある生徒への支援ほどの程度有効であったと感じますか。あてはまるものに○をつけてください。

- (A) 有効であった B やや有効であった C あまり有効ではなかった D 全く有効ではなかった
- ア 生徒個別支援シート (A・B・C・D)  
 イ 学年会の開催の有無を決定する為に生徒個別支援シートを用いたこと (A・B・C・D)  
 ウ 学年会での支援方法の検討 (A・B・C・D)  
 エ 支援方法の定期的な見直し (A・B・C・D)  
 オ 適応指導教室による生徒の早立て・支援方法への助言 (A・B・C・D)  
 カ 適応指導教室による働きかけ【欠席者の確認等】 (A・B・C・D)

問9 改訂3日目シートの良かった点、良くなかった点があれば教えてください。

【良かった点】

【良くなかった点】

問10 学年で行った支援方法の話し合いについて、良かった点、良くなかった点があれば教えてください。

【良かった点】

【良くなかった点】

問11 今回の研究においては、適応指導教室による助言等を行いました。このことについて学校として良かったと思われる点、改善が望ましいと思われる点についてお答えください。

【良かった点】

【改善が望まれる点】

ご協力ありがとうございました。

不登校への初期対応に対するアンケート 【事後】

四日市市適応指導教室

今回の取組が行われた9月から11月末を対象にお答えください。

【担当学年 1 年・ 担任 ・ 副担任】

問1 「生徒が不登校傾向」ではないかと感じるのは、果敢欠席日教が何日になった時ですか。

( 日 )

問2 「生徒が不登校傾向」ではないかと感じ、初期対応を始め、初期対応が終わるのは果敢欠席が何日目ですか。(家庭訪問や学年間での相談等)

( 日 目 )

問3 改訂「欠席3日目シート」は活用できていますか。あてはまるものに○をつけてください。

- (1)十分活用できている →  問4へ  
 (2)まあまあ活用できている →   
 (3)あまり活用できていない →  問5へ  
 (4)ほとんど活用できていない

問4 問3で「(1)十分活用できている」「(2)まあまあ活用できている」と答えた方に質問です。記入することでのように活用していますか。(該当するものすべてを○をつけてください)

- ア 作成者が、生徒の欠席に対して意識を持つことができた  
 イ 作成者が、該当生徒への理解を深めるきっかけとなった  
 ウ 作成者が、生徒の欠席に対して意識をもることができた  
 エ 学年教師集団が該当生徒について情報を共有することができた  
 オ 記入することで、学年教師集団が該当生徒についての情報を共有するだけでなく、支援方法を考えることができた。  
 カ 学校全体で該当生徒についての情報を共有することができた  
 キ 学校全体で該当生徒についての情報を共有するだけでなく、支援方法などを考えることができた  
 ク その他

問5 問3で活用できていないと答えた方に質問です。活用できていない理由は何ですか。

(該当するものすべてを○をつけてください)

- ア 情報量が多くて、何に注目したらよいかわからないから  
 イ 書いたあとの活用方法がわからないから  
 ウ 必要性を感じていない生徒にも作成しなければならぬから  
 エ 活用したいと思っっているが、話し合いなどの時間を持つことが難しいから  
 オ 活用したいと思っっているが、支援方法をどう考えていいかわからないから  
 カ その他

問6 あなたの学校では、「不登校傾向のある生徒」に対する支援方法を検討する会議や学年会等を行っていますか。

- (1) 十分行っている (2) 時々行っている  
 (3) あまり行っていない (4) ほとんど行っていない

問7 あなたの学校では、「不登校の生徒」(欠席30日以上)に対する支援方法を検討する会議や学年会等を行っていますか。

- (1) 十分行っている (2) 時々行っている  
 (3) あまり行っていない (4) ほとんど行っていない

＜おおよその基準＞

十分…週1回程度  
 時々…月2回程度  
 あまり…月1回程度  
 ほとんど…それ以下

研究協力校で実際に行なった見立て、支援の状況の一例を示した。

●友人関係・学習に理由がある場合

<欠席の理由等>

友人関係がきつかけで孤立していることがある。

学習面に苦手意識があり、提出物は提出するが完璧な状態に仕上げられないことがある。

<学校側の支援計画>

活躍の場の設定（部活動、行事、仕事を与えるなど）教師側からの声かけ、生活班の構成の配慮

<適応指導教室からの助言等>

学校へ行き対象生徒の様子を観察（教師に信頼感を持っている点、休み時間の様子で気になった点など）

提出物の進め方（短期的な提出物の取組の目標の設定）

活躍の場をいつ頃どのように持たせるかの確認等

<現在の様子と今後の方針>

活躍の場の設定がうまくいき、以前よりも調子が良い。月の累積欠席が2~8日見られるものの、このペースで登校が続けられれば良いと考えている。

●病気・学習に理由がある場合

<欠席の理由等>

体調不良（起立性調節障害）により体が思うように動かない。

自己表現が苦手

学習に対するプレッシャーがある。

完璧主義、保護者の学習に対する期待が高い。

<学校側の支援計画>

期限を決めて別室登校を認めた。（教室に入れるときもあもあまったが安定しない）

別室登校後どのように支援をすればいいかという迷いがあった。

<適応指導教室からの助言等>

進路決定までの見通しをもたせ、自分が今何をすべきかを気づかせる。

今必要な支援は何かを保護者に理解してもらい学習での遅れに対する焦りを軽減する。

学校としてできる最大限の支援を想定しておく（人の配置、支援の内容、タイミング等）

<現在の様子と今後の方針>

遅刻、早退はあるものの通学することができている

起立性調節障害と診断されていることから、無理をさせるのではなく、本人のできるペースで通学を続けていく方向でいくべきだと考えている。

●家庭状況の変化に理由がある場合

<欠席の理由等>

家族状況の変化・友人の欠席

<学校側の支援計画>

学校での様子を母に伝える

カウンセラーとつなげる

<適応指導教室からの助言等>

得意なことやをきっかけにして、部活動の参加から登校を促していく。

進路に向けて、具体的な見通しを持たせていく。

<現在の様子と今後の方針>

保護者とながらうことはできている。保護者を支えながら、本人の支援につなげていく。友人とのつながりもあるので、そこからのアプローチを考えていく。

**支援内容の詳細**

<例>A校において

7月 研究依頼に行った際には、累積欠席10日の生徒はいなかった。

9月 生徒Aが月の累積欠席3日に達した。また、累積欠席10日を超えた。  
担任は、「改訂欠席3日目シート」の記入 → 管理職・教育相談担当・適応指導教室に報告

**①欠席日数による気づき**

\*考えられる欠席理由は「友達関係のこじれ」「学習面の遅れ」に○がついた。

\*生徒個別支援シートには、人間関係の項目の「孤立している」に○がついた。

担任からみた生徒の課題は「欠席することに対するハードルが低い」ため、本人が困難だと感じるとすぐ欠席してしまう」であった。

**②情報共有・指導方針の確認**

\*欠席理由が「人間関係のトラブル、宿題ができていない」など話す人によって理由が違ったため、学年会を行った



「改訂欠席3日目シート」の情報だけでは、わかりづらい部分があったため適応指導教室が学校訪問を行い生徒Aの授業中・休み時間の様子の観察を行った後、適応指導教室内で会議を行った

**③多方面からの見立て・支援方針の確認**

その後、適応指導教室の指導員と教員で学年会を行った  
生徒の状態から、来月の目標を設定

\*「本人の活躍の場を設定する」行事の実行委員や役員などをすすめる

\*「学習の支援」少しずつ提出物を取り組ませる声掛け、学習方法などをアドバイスする

\*「大人との関係をつなげる」子どもたち同士の関係に疲れている部分があるので、安心して話せる存在として教師が気にかけていることを気づかせる

10月 生徒Aの欠席1日

先月よりも状態が良くなっている

支援方法の見直し・評価を行った

来月の目標を設定

\*「本人の活躍の場を設定する」後期室長になり、役割をきちんと果たしている  
部活動も休まず行くようになり、試合にも出場できた

\*「学習の支援」テストの結果は本人が望む結果ではなかったが、本人がその結果を受け入れられた

<以下 同じ流れを継続>

**④定期的な支援の見直し・評価  
継続した支援**



**不登校生徒への初期対応と校内体制についての研究**  
**－欠席3日目シートの活用を通して－**

〔執筆者〕 四日市市適応指導教室            指 導 員    北保 絵美  
                 四日市市適応指導教室            指 導 員    奥野由佳里  
                 四日市市適応指導教室            指 導 員    宮崎 久美

〔指導・助言〕 国立教育政策研究所            総括研究官    山森 光陽

---

研究調査報告 第406集

**不登校生徒への初期対応と校内体制についての研究**  
**－欠席3日目シートの活用を通して－**

発 行 平成30年 3月 9日  
発行所 四日市市教育委員会教育支援課  
         四日市市諏訪町2番2号  
電話 (059) 354-8149  
FAX (059) 359-0280

---